

アのうちに、自己特権化の誘惑からの脱却の困難を見る。結論で論者は、真の自律なくして平等性は確立されないと述べるが、評者としては、むしろ多様性を確保する地盤が文化の単一栽培からいかに自由たりうのかに、優れて北米合衆国的な問題が存しており、在日の問題がこの議論の土俵に乗るのか否か、そして日本における在日問題が韓半島ではなお正面から相手にされない状況にこそ、より深刻な問題が探られるのではないかとの意見を持った。

孫才喜氏は、作家、張赫宙（1905—1998）に焦点をしばり、その詳細な経歴を分析することを通じ、日本支配下で日本語作家として立った作家の国語選択を問題とした。張の東京における日本文壇への参画は、韓国文壇からは罵倒、嘲笑を受け、作家はそれに憤慨して、日本語作家としての独立宣言を公表する。それはさらに祖国への罵倒に等しい発言へと繋がり、それが日本人側の見解に同調したものであったため、さらに朝鮮側知識人の批判に晒されることとなる。こうした心理的軋轢の背景として、論者は親日的姿勢への傾きと、近代性獲得への志向が重層的に癒着していた文化状況を摘出する。とともに東京の文壇に受け入れられる朝鮮を描く行為が、祖国との疎外と表裏一体であったことも、否定できない。『加藤清正』（1940）のような歴史小説、万宝山事件に取材した『開拓』（1943）は、民族間の軋轢のなかで個々人の立脚点の対比を試み、中立的で多面的な視点を獲得しようと努めている点を論者は評価する。内鮮一体を主題とした作品群も、当時の皇民化政策に貢献する価値観の表出は当然としても、そこに孕まれた屈曲した現実を描いた点を、論者は評価しようとする。戦後の作品群に関しては、発表時間の都合で詳述できなかったが、移住民としての作家のディアスポラ的性格の検討には、他の作家の例との比較など、さまざまな可能性が残っているように見受けられた。韓半島では、親日との評価ゆえに、従来議論の対象にもならなかったこの作家を分析する論者の試みには大きな意義を認めうるが、時代背景を捨象しても有効な理論的枠組みの設定には、なお多くの課題が残っており、また分析方法にも、切り込みに尚独自の視点を切り開く可能性が残されている。

（稲賀繁美）

南富鎮氏の発表「ディアスポラの内面心理—日本語と日本女性に向かう情熱」は、韓国人作家皮千得や蔡万植、在日作家金城一紀などの作品を通して植民地時代の内鮮恋愛や内鮮結婚、日本語への欲望の問題などを扱ったものである。発表者は、作品に描かれた主人公（韓国朝鮮人）の欲望は終局的

に朝鮮側に収斂するのではなく、日本側に還元されるものであると言っている。また南富鎮氏は、このような現象が植民地時代だけではなく、戦後にも植民地的な文化構造が依然として続き、それが韓国の戦後的な文化現象としてディアスポラの内面的心理を形成していると指摘し、日韓における朝鮮人のディアスポラ現象にはこうした植民地的な文化現象が大きく介在していると解釈した。文学の作品に表れた韓国朝鮮人のディアスポラの構造を診断したユニークな発表であったと思われる。

金仁徳氏の発表「在日朝鮮人の民族運動における文化闘争と闘争文化」は、1920年代から1930年代初め頃までの在日朝鮮人における文化闘争や闘争文化について扱ったものである。金仁徳氏は、戦前在日朝鮮人の文化は「民族」・「共生」・「同化」という概念を中心にみると、「民族」と「同化」的な要素が重畳されていると言っており、また支配と被支配の文化的様相が個別的に活動空間に現れたというよりは混在していたと指摘している。また彼は朝鮮村に注目し、朝鮮村を「抵抗的文化空間」でありながら同時に日本社会へ出て行く在日朝鮮人の準備空間としても捉えている。金仁徳氏の発表は、これまで注目されなかった在日朝鮮人の文化闘争に対する意味をみんなに考えさせられる発表であったと思われる。

(李漢燮)